

絵日記による英作文指導

—英語の苦手な生徒に対する授業への取り組みについて—

浅見 吏郎

1. はじめに

本校は北海道の中央部、空知地区にあり、北海道第1の都市である札幌市と、第2の都市旭川のほぼ中間に位置する。地域の産業は、学校の周辺には工業地帯が広がっているが、町の中心部から離れた地域では、主に農業(米作)が主な産物である。市内には公園がいたるところに設置され、自然環境はよい所である。

本校の生徒は、全般的に英語に対する学力が高いとはいえない。平成13年度の1学年の生徒については、アルファベットの順番どころか、大文字・小文字の区別さえおぼつかない者も多数いる。学力検査の得点は、英語の最高点が21点、最低点は2点、平均で10.0点という程度のものである¹⁾。このことは、中学校の初期レベルの英語でさえ、十分に身につけていないことを物語っている。

生徒に見られる傾向として共通な点は、中学時代から英語に対してかなりの苦手意識をもっているということである。苦手だからわからない、わからないからおもしろくない、おもしろくないから授業も聞かないという悪循環が見られ、その結果、ますます英語に距離を置くようになってしまう。本校の教員は、このような「英語嫌い」の生徒がほとんどというなかで、いかにして英語に興味をもたせるか、その動機づけをいかにするかということを、大きな課題としている。

平成12年度、第2学年のオーラルコミュニケーションAの授業を担当していたとき、8月末の最初の授業で、夏期休業中の過ごし方についてある余談をした²⁾。休業中の生徒の動静を聞いているうちに、1つの試みとして絵日記を書かせてみた。用紙の上半分には絵を描かせ、下半分には日記風に、夏休みのでき事を日本語で書かせた。当初の予定では、英作文の指導をすることはあまり念頭に置かず、自由に

絵を描かせることによって、自分の意志を他人に伝達させることを目的としていたのであった。さらに、第3学年のライティングの授業でも同様の課題を与えてみた。予想に反して生徒の反応がよく、なかには英語で日記文を書こうと努力する生徒も数人見られた。

平成12年度の経験から、平成13年度はさらに発展させ、絵日記を利用して英作文の指導につなげてみようと考えた。

この実践報告では、英語の学力が低い生徒に対してのアプローチを紹介するとともに、英語(特に英作文)が苦手な生徒は、どこが理解不足であるのか、何が理解できないのかを考察してみたい。

2. 絵日記の実践

英作文指導に絵日記を利用しようと考えたのは、主に下記の理由によるものである。

- ・自分が実際に体験したことを書かせるため。
- ・絵を描くことによって、文を導き出すため。
- ・長文ではなく、短い文で指導するため。
- ・複雑な文法事項には触れないようにするため。
- ・主題となる人称のほとんどを、1人称に統一するため。
- ・過去の体験を表現することから、時制を意識するため。

平成13年度は、オーラルコミュニケーションのクラスを担当していないので、ライティングのクラスでの授業を念頭においた。ただし、学年による学力の定着度を計るため、担当しているクラスすべて(5クラス)で絵日記を書かせた。被験者は第1学年35名(2クラス・英語I)、第3学年35名(3クラス・ライティング)で行った³⁾。第3学年については、前年度も同様なことを行っているの、生徒間での違和感が感じられず、比較的スムーズに行われた。第1学

年では、絵を描くことに精一杯の生徒も見られ、思ったとおりの回収は難しかった。

実施方法については、以下のことを1学期末にあらかじめ指示しておいた。

- ① 2学期最初の授業で、絵日記を書かせる。
- ② テーマは「私の夏休み」とする。
- ③ 絵と日本語による日記は必ず書く。
- ④ 日記文については、小学生になったつもりで簡素な文章にする。
- ⑤ 自信のある生徒は、英文の日記も考える。

⑤について、第3学年のクラスでは、できるかぎり書くように指示を出した。その際に、正確な文でなくてもいいので、わかる範囲で単語を並べる程度でよい、とした。なかには辞書を使用し、可能なかぎり正確な英文を書くのを試みる生徒も見られた。結果として21名の生徒から英作文を含むものが回収できた。

3. 生徒の英作文例

以下に、生徒が実際に書いた日記文を掲載する。原文には手を加えず、提出された形でそのまましておく(ただし、文頭は大文字に直してある)⁴⁾。

1年男子

- (1) A・家に帰った。インターネットで遊んだ。世界のニュースやいろいろなスポーツのデータを見ました。

Went home. Plre internet is watch world news and many sports data.

- ・CDを聞いてたら、寝てしまった。

I'm listen to CD is sleep.

- (2) B・ぼくは、友達と海に行った。天気がよかった。ひさしぶりにいったのでけっこう楽しかった。おわり

I friend, sea go. Enjoy.

- ・今年の夏休みはほとんど寝てた日が多かった。ひまだった。おわり

Sammr Vacation sleep.

- (3) C・友達と遊んだ。友達と焼き肉を食べた。楽しかった。

Friend play. Friend eat yakiniku. Enjoy.

- ・はかに行きました。

Go cemetery.

- (4) D・僕の友達が僕の家泊まりにきて蚊にさされ

て次の日見たらすごく赤くはれ上がっていました。

I friend red insect.

- ・僕は夏休み中に車にひかれそうになった。とても危なかった。

I car dangerous.

- (5) E・ねてた

Sreeping.

- ・友達と遊んでた。

Friend is a play.

- (6) F・友達とサッカーをした。

Friend is a play soccer.

- ・親と買い物に行った。

Parents is a go shopping.

- (7) G・毎日、寝てた！！

I sleeping everyday.

- ・ごはん、食べた！！

I eat everyday.

- (8) H・友達と花火をした。

Friends were play fire works.

- ・友達と焼き肉をした。

Friends were play grilled meat.

1年女子

- (9) I・家族で海に行った。カニをいっぱいつかまえた。楽しかった。

With my family go to sea. Get a crabs.

Pleasant.

- (10) J・家族で海行った。あり(註：生徒名)がいた。

With my family fo to sea. Bepend Ari.

- ・ねーちゃんがカメとってきた。

My sister get a tortoise.

- (11) K・カブトムシをとりに行きました。楽しかったです。

Beetle get to go. It was very interesting.

- (12) L・友達とビクトリアに行ってステーキを食べて、2、3時間ぐらいいいた。

I go to bictoria(?)with friend. I eat stake.

3年男子

- (13) M・友達と夜12時頃花火をしました。3時間しました。最後はやっぱり線香花火！！

Play a sparkler. Friend the final senkou sparkler.

- (14) N・とてもきれいな夕日だった。初めてみた。

Very beautiful evening sun!! Look at for

the first time.

- ・ほくは、この夏休みに初めてバイトをした。とても疲れた。

I did a part time job in this summer vacation for the first time. Very tired!!

- (15) O・私は友達の手で旭川に行った。とても楽しかった。

I went in Asahikawa bu friends car very happy.

- ・私は花火を見に行きました。とてもきれいでした。

I went hanabi very beautiful.

- (16) P・虫をとりにいきました。とっても楽しかったです。セミととんぼを2匹ずつとりました。もう死にました。

I take mushi very interesting. Very interesting. Very enjoyed. Two tombo and semi. Died.

- ・首吊る夢を見ました。泣きました。寝不足でした。

Look at bad dream. Cried. Not sleep.

- (17) Q・夏休みを僕は東京へ遊びに行き、2つのテレビ局を見に行きました。

I went to Tokyo as reisure, two visit TV station in summer vacation.

- ・僕はお盆に夕張へ行った。

I went to Yubari in Bon.

- (18) R・3日間海であそんで岩からおちてケガをした。おわり

For three days sea played, fell from the rock hurted.

- (19) S・友達と遊んだ。楽しかった。

All night friend played, enjoyed.

- ・いつもいっしょのともだちとあそんでました。

All night always with friend played.

- (20) T・私はつりに行きました。私はつりには向かないと思った。

I went to fishing. I felt inadequate to the fishing.

- ・私は札幌に行きました。観光客の数が増えたと思う。とても疲れた。次の日あまりにも疲れていて早くおきられなかった。

I went to Sapporo. Tourists have increased in number. I'm feeling very tired. I was so tired that I couldn't get up early next day.

3年女子

- (21) U・花火見に行った。きれいだった。

Fireworks weat. It's beutigul.

4. 分析・検討

提出された絵日記から、本校生徒の英語力について、次のようなことが判断できる。

まず1つ目に、英単語の語彙数が不足していることである(ただし、ここではスペルミスは取り上げないことにする)。(2)(4)(13)の文ではその傾向が特に現れている。日本語の日記では多くの情報を書くことができるが、英語の日記にすると、比較的容易な単語を並べるだけになってしまう。つまり、日本語で考えた日記と英語の作文の間には、表記されない情報が多くあるということである。

2つ目は、基本的な文型が理解できていないことである。第1学年の英語Iでは、まだ文型についての授業を行っていなかったことも1つの原因ではある。第3学年については、主語の次に述語動詞が来ることは理解しているが、主語に何をもちくることが曖昧である(このことは、次の3つ目にも関係している)。「だれが何をした」かを正確に表現できていないことが、大きな原因であろう。

3つ目めとして、主語を何にするのか判断できていないということである。(3)(5)(8)(13)(19)では、「友達と遊んだ」ことが書かれているが、「Friend play(ed) ~.」、「Friend is play ~.」のような英文になっている。また、「親と…」は「Parents is ~.」や、「家族で…行った」の「With my family go ~.」の形も見られた。日本語で表現する際には、時に主語を省略することもあるので、日本語と英語の表現を混同しているのであろう。

4つ目めに、動詞の働きについて理解が不足しているということである。特に時制(tense)、相(aspect)を正確に判断できていないことが見受けられる。加えて(1)(6)(8)に見られるとおり、必要以上にbe動詞を使用する傾向がある。その原因の1つに、中学時代初めに習った「be動詞=です・ます」の感覚が強く残っている事が考えられる。まず、be動詞の働きから再度理解させなければならない。

全体を通じて言えることは、普段の日常会話的な日本語を意識するあまり、英語に訳す際に名詞中心の文を作りがちであるということである。(述語)動

詞の働きや意味を理解できていない事が見受けられる。

5. 今後の指導および課題

最初に考えられることは、まず語彙数を増やす指導が必要であろう。そのなかでも中学校で既習の動詞を定着させることが最初の段階として考えられる。その際に動詞の変化(原型—過去形—過去分詞形)について再確認させる必要がある。また、人称による変化(いわゆる三単現の-s)についても確認が必要であろう。これらが理解できたとえ、進行形や完了形などを確認させたい。名詞や形容詞については、必要に応じて語彙を増やさせるようにする。生徒の理解力に合わせ、無理に詰め込むのではなく、生徒が要求するレベルでの指導を中心とする。そして一度覚えた語句は、繰り返し使用させる環境を作るように心がけたい。

次の段階は、基本的な文型の指導である。5文型の指導についてはさまざまな論議があるが、本校のように英語が苦手な生徒については、第1文型(SV)、第2文型(SVC)、第3文型(SVO)までは確実に定着させたい。特に主語がだれ(何)であるのかを認識させる必要がある。加えて、be動詞についても、どの文型に現れるのかを理解させたい。

全体的に、日本語と英語との間には大きな差があるということ、初めに気づかせ、どの点が違うのか、また、どの点が同じと考えてもよいのかを考えさせてもよいであろう。それがきっかけとなって、英語に興味をもってくればよいと願っている。

6. まとめ

最初にも述べたが、英語を苦手とする生徒に英語を教える事は、とても難しいものがある。このような生徒は、英語だけではなく国語力の不足も十分に考えられる。日本語の構造を正しく理解させることは、英作文の指導上、重要な点である。「いつ」「どこで」「だれが」「何を」といった、いわゆる5W1Hを、日本語でもしっかり意識させていきたい。

英語に対する苦手意識を取り除き、いかにして興味を引かせるか、いかにして理解させるか、毎日が試行錯誤である。

(注) この実践報告は、前任校での取り組みを報告し

ているものです。

- *1 北海道の高等学校入学者選抜検査は、各教科60点満点である。平成13年度入学者には、本校はリスニングテストを課さなかった。
- *2 北海道の夏期休業は本州に比べ短く、8月下旬にはもう始業している。
- *3 第1学年全体63名、第3学年全体65名。実施当日に欠席者が多数あったため、実際の被験者数は少なくなっている。
- *4 使用した用紙は、B4判の上質紙を半分に折ったもので、左と右に各1つの話題を書かせた。

(前 北海道砂川北高等学校教諭、現在は 北海道岩見沢農業高等学校に勤務)